

小学生が子ども議会
狛江の課題取り上げ

小学生たちが狛江市の課題について述べる子ども議会が8月3日(日)に狛江市議会議場で開かれた。

子ども議会は、狛江市の将来を担う子どもたちが、自分自身の問題として市について考え、夢や希望を話すことで市政への参加意識と関心を高めようと平成19年から隔年で開かれており、今回で7回目。



意見を述べる子ども議員

市立小学校6校から3人ずつ、合わせて18人の6年生が議席に座り、議長も子どもが務めた。保護者や先生たちが傍聴席から見守り、議場は本番さながらの緊張した雰囲気にも包まれた。「子ども議員」からは「子どものための遊び場を整備してほしい」「学校のプールを屋内にしたほうが良い」「和泉多摩川駅付近に大型商業施設の誘致を」など、普段の生活の中で気付いた改善

点などが一般質問としてあげられた。



これに対し、松原俊雄市長や有馬守一教育長らが現在の市の現状や財政状況などを含めて、いねいに答弁、子ども議員たちは熱心に耳を傾けていた。

夏休みの居場所と
子ども食堂に人気

「夏休み子ども・中高生スペース」事業が市立小・中学校が閉校中の8月13日(月)～18日(土)に中央公民館で催され、期間中に親子延べ約500人が参加した。

学習のためのフリースペースでは中学生が勉強、遊びのスペースでは小学生が友人などとボードゲームやプラレールで遊んだ。スクラッチアートやペーパークラフトの無料体験には多くの幼児も参加した。

市内の4団体が協力した子ども食堂には子どもだけでなく、乳幼児や高齢者も訪れ、昼食を楽しんでいた。低学年の小学生を連れた母親は「毎日子どものお昼を作るのが少し大変だったので、リフレッシュできました。体験教室も楽しかった」と笑顔で話した。

この事業は昨年初めて実施されたが、今回は、夏休み前に学校でチラシを配るなど周知に力を入れ昨年を大幅に上回る参加者があり、子どもたちにも好評



にぎわう子ども食堂

だったことから、来年度以降も続けたいと中央公民館では話している。

地域福祉の現状を学ぶ
「福祉カレッジ」を開講

地域の福祉について学び、考える「福祉カレッジ」を社会福祉法人狛江市社会福祉協議会が催す。

福祉カレッジは、講義に加え個人ワークやグループワーク、フィールドワークで地域の活動者や当事者などの生の声を聴いて考え、対話することで地域の福祉の現状を学べる実践的なプログラムが特色。

期間は10月2日(火)から2月5日(火)までの水曜日で全13回。時間は午後7時から9時。会場は市民活動支援センターこまえくぼ1234(和泉本町1-2-34)。

対象は市内在住または在勤者で定員先着15人。受講料3,000円。

申し込みは2日(日)～24日(日)に狛江市社会福祉協議会福祉カレッジ担当(☎3488-0313)へ電話、またはホームページから。

平和フェスタ2019
沖縄をテーマに

こまえ平和フェスタ2019(こまえ平和フェスタ実行委員会主催、狛江市・狛江市教育委員会など後援)が8月18日(日)に狛江エコーホールで催され、参加した500人を超える市民たちは戦争の悲惨さを振り



◆ 80 ◆

豊富な商品知識とアフターサービスが強み

狛江市役所入口交差点前の木村メガネ(中和泉1-1-1-103)は、市内で最も古い眼鏡専門店。

店主の木村紘さん(78)は世田谷区の経堂駅前で時計・眼鏡店を営む家に生まれた。父の喜一郎さん(故人)は、老舗時計店で働いた後、池袋駅近くに初めての店を持った。昭和2年に小田急線が開通した翌年に、沿線の将来性を見越して経堂駅前へ移転、時計修理の技術では都内でも有名な店になった。父に似て手先が器用だった木村さんは幼い頃から家業に興味を抱き、中学生の時に柱時計の外側の掃除を手伝い、後に父の指導を受けて時計の構造や修理を覚えた。その後、眼鏡にも興味を持ち、高校時代の夏休みに眼鏡専門店を構成する団体の技術講習会に参加して資格



木村さん

を取得、顧客の視力測定やフレーム選びのアドバイスをを行った。木村さんは

木村メガネ

高校を卒業した後、家業の眼鏡部門を手伝っていたが、実家は5歳上の兄が継ぐことになっていたこともあり、48年に2番目の姉の夫が千歳船橋駅前に眼鏡関連の会社を設立した際、社員になった。義兄の会社は、眼科医の処方箋による眼鏡作りを主に扱っており、狛江町(当時)からの注文も多かった。狛江の人から注文された眼鏡を渡すのに適当な場所を町内で探したところ、現在の場所近くに2階建ての店舗付き住宅が見つかり、同社の支店を兼ね、義兄の姓を入れた「林眼鏡店」として同年に開店、木村さんが店長になった。

狛江の人から「ようやく眼鏡専門店ができた」と歓迎され、順調に業績を伸ばした。その後、隣でレコード店を営んでいた狛江出身の金子さんと結婚、54年に独立して店名を「木村メガネ」に変更した。熱心な地域活動を通じて商店街を発展させた父にならって、木村さんも地域の行事に参加したり、商店会活動に積極的に取り組んだ。最初の店舗は狛江通り拡張のため

昭和48年に開業／フレーム約1,500点／地域活動に尽力

フェスタ合唱団が出演、ユキヒロさん作詞・作曲の「HEIWAの鐘」と「今日から明日へ」などを披露、最後に沖縄風に編曲した市の歌「水返るとともに平和への誓いと緑のまち」が披露され、参加者もカチャーシーと一緒に踊っていた。

こまえ市民大学
オリ・パラ準備状況と
インバウンドをテーマに

こまえ市民大学が東京2020オリンピック・パラリンピック大会の準備状況

とインバウンドについての講演会を中央公民館で催す。14日(日)午後2時～4時は公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会副事務総長の布村幸彦さんが、「東京2020オリンピック・パラリンピック大会の準備状況について」スポーツには世界を変える力がある」と題して開催まで1年を切った東京オリンピック・パラリンピックについて、エピソードを交えながら準備作業などを紹介するとともに、オリンピック・パラリンピック開催の意義を訴える。定員100人で、申し込み

建て替え、62年に新店舗が完成した。同年に狛江通り沿いの店舗11店で「セントラル商店街」を結成、歩道を滑りにくいインターロッキング舗装にしてベンチを置いたり、多摩川いかにレースに商店街として第1回から参加した。木村さん自身もいかにレース実行委員会に入り、長く裏方を務めている。狛江駅前再開発の時、近くで本屋を営んでいた妻の兄が、同店を含む一画に再開発ビル「エコー3」を建設、平成7年に現在の店がビルの1階にオープンした。

認定眼鏡士SS級の資格を持つ木村さんは、豊富な商品知識で客にアドバイスし、きめ細かいアフターサービスを行うほか、1,500点以上の眼鏡フレームを揃えて若者や女性など流行に敏感な消費者の心をつかんでいる。また、店頭で年中行事のミニチュアを飾って子どもや通行人の目を楽しませている。木村さんは「長い付き合いの積み重ねでお客さんの希望に対応できるのが、私たち専門店の強み。できるだけ長く仕事を続け、たくさんの人に喜んでほしい」と話している。

木村メガネ ☎3480-9367 営業時間＝午前10時～午後7時。水曜休み

は中央公民館へ。28日(日)午後2時～4時はJTBSGMT Tokyo 2020推進室長で元日本政府観光局地域プロモーション連携室長の広瀬正彦さんが、「オリンピック・パラリンピックは序章に過ぎないインバウンドが日本にもたらすもの」と題して観光先進国を目指すわが国の戦略とインバウンドの本質、国民生活への影響などについて講演する。

定員は50人で申し込みは2日(日)から中央公民館。受講料はいずれも200円。申し込み・問い合わせ☎3488-4411中央公民館。

Start & Challenge
食物アレルギー対応食作りの講習会

こまえアレルギーの会(早坂織香代表)は、アレルギー患者やその家族が抱える不安や悩みを共有し、情報交換をしながら安心できる場を作ろうと、昨年10月に発足した。現在会員は13人で、月1回定例会を開き、食物アレルギーへの理解を促すための活動を行っている。

ことしは、市民公益活動事業補助金のチャレンジ補助金を初めて受け、アレルギー対応食作り講習会を3回開催するほか、食品メーカーとの連携を深める。



そうめんを作る参加者

8月4日(日)に「そうめんを作ろう!」と題した講習会を開催。参加したおとなと子ども合わせて21人が小麦粉を使わないそうめん作りにチャレンジした。米粉と片栗粉を練って製麺機を使い約30分で作り上げた後、流しそうめんにして味わった。卵と小麦、ナッツ類、ゴマのアレルギーがある8歳の男の子は「生まれて初めてそうめんを食べてとてもおいしかった」と喜んでた。また、環境アレルギーアドバイザーの半谷輝己さんが「食品の安全と安心」について講演した。自らも食物アレルギーを持つ代表の早坂さんは「これからもアレルギー患者の生活の質が向上するよう努力したい」と話し、11月10日(日)に災害時の炊き出しを想定した「カレーライスを作ろう!」、来年3月上旬に「パンケーキを作ろう!」を開催する予定。

問い合わせ☎komae.allergy@gmail.comこまえアレルギーの会 早坂さん。